

青年部2021年も 共に頑張りましょう！

皆さん新年あけましておめでとうございます。今年も宜しく願います。

未だにコロナウイルスの感染拡大が収まらず現場も含め、大変な日々が続いていますね。私たち本部青年部も2回目の緊急事態宣言を受け、機関会議や諸行動の自粛を強いられています。皆さんとも交流ができず寂しいです。1日も早く皆さんと「学習と交流」ができる日が来ることを切に願っています！！

宣言前の昨年(2020年)の12月には、【青年部秋闘学習会】
【「生命と権利」を守る青年部総決起集会】を開催してきました。事前に氏名報告による人数把握や当日の検温・消毒による感染予防対策をしつかりと行い開催をしてきました。このような状況の中、多くの青年部の仲間が結集しました。

今後の活動は情勢を注視し、機関会議が再開された際に本部青年部で話し合い、随時皆さんに報告させていただくのでよろしく願います。
今年1年もウイルスに負けず共に頑張りましょう！！

余談ですが私、武井は今年本厄なので気合入れて1年過ごしたいと思えます。

学習している仲間の様子



【秋闘学習会】

講師 多田書記長

今回の賃金確定闘争は、一時金に関しては、0,05月の引き下げ、月例給は改定なしとなり「報告」という形になりました。勧告を出している人事委員会は本来、労働者の立場に立って勧告をしなければなりません。近年「第2の当局」と言われるほど厳しくなっています。

また、区長会は常に業務職給料表が高い水準にあるという認識があり、この認識を変えなければ引き上がることはないと思います。来年も厳しい勧告が予想されますが様々な取り組みを駆使ししっかりと闘っていきたいと思います。下げられ続けられるのではなく、どこかで同額分のもの勝ち散ることが大切であります。

【「生命と権利」を守る青年部総決起集会】

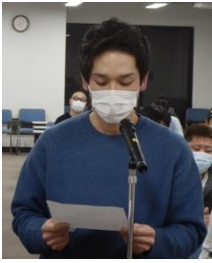


12月14日に開催されました。この集会は、安全作業確立に向けた青年部の通年統一行動として毎年この時期に取り組んでいます。今回は、来賓で基本組織より中里委員長にお越しいただき、「現場の視点でしっかり訴えていってほしい」「安全対策をした後にそれを評価することが重要」といったお言葉をいただきました。その後、ステッカー及びポスターの配布・取り扱いについての説明をしました。すでに皆さんの職場で掲示ステッカーについては手元に届きヘルメットに貼付していただけると思っています。話し合いを経て確認したことを胸に安全作業を心掛けていきましょう！！

また集会では、各地連代表より決意表明もしてもらいました。

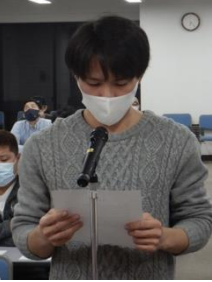
コロナ下で慣れない仕事のやり方で体調不良や怪我がありました。第1地連では安全作業を心がけ「労働力は売っても生命までは売らない」ことを各支部に持ち帰り職場から運動を進めていきます！

第1地連 中央支部 赤岩さん



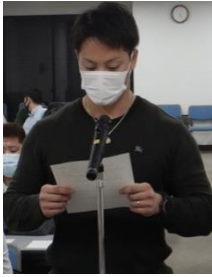
北区で採用があったなど近年第2地連では青年部員数が多くなってきています。横のつながりを大切にしてこれからも安全作業に向けた取り組みを強化していきます！

第2地連 台東支部 中村さん



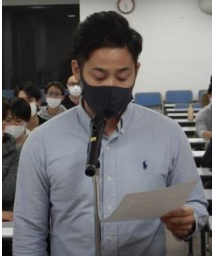
第3地連では、11月に活動を再開し、各支部報告などで安全作業について話し合っています。当局の合理化攻撃を断じて許さず、本部に結集して青年らしい働き続けていけるような運動を展開していきます！

第3地連 渋谷支部 神崎さん



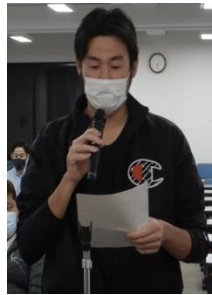
第4地連は、年末年始作業を迎えるにあたり青年部で安全作業について話し合いました。現在ある危険な仕事のやり方を青年部から変えていけるような取り組みをしていきます！

第4地連 練馬支部 黒田さん



私自身仕事の中でふれあい指導の際、開封調査などを通して感染の危険があると思いました。安全面への配慮はこれまで以上に必要です。第5地連では、些細な取り組みの積み重ねにより、真の安全作業を追求していきます！

第5地連 江東支部 斎藤さん



知識の集積所

〈労働組合の起源〉

はじめに労働組合の始まりは 18世紀～19世紀にかけて起こった「産業革命」まで遡ります。「産業革命」とは18世紀中ごろ～19世紀初頭にかけて、イギリスで機械製工場と蒸気機関を利用した技術革新が始まり、今まで手作業で生産していた服や食器、家具といった身の回り物が工場で大量に生産されるようになりました。機械生産が盛んになったことで熟練職人だった労働者たちは職を失い、工場などで働く人々(賃金労働者)が多く生まれました。さらに、この労働者たちは1日14時間～15時間の過酷な労働や低賃金、不安定な雇用(即クビ)など、劣悪な労働条件を強いられました。そして、「機械破壊闘争」を行って昔の生活を取り戻そうとした労働者たちは、徹底的に企業(資本家)の手によって弾圧を受けました。その中で、資本家に対する個人的で非組織的な「戦い」ではなく労働者の生活と権利、生命を守るため、資本家やその立場に立つ政府と「闘う」ために団結しようという労働運動が自然発生的に生まれました。当時、今のように洗濯機や電子レンジなどの家電もなく、コンビニやファストフード店も無い時代です。その中で、劣悪な環境で生活を送っていた労働者たちが唯一の息抜きをすることが出来る場所がパブ(居酒屋兼コミュニティ・ハウス)だったのです。見ず知らずの人たちが、お酒を片手に話しながら仕事の不満や今後の不安、様々な心配や身の上話を語り、会社への怒りや不公平感などをぶつけ、日々のストレスを発散していたそうです。やがて、労働者たちは病気やけがで満足に働くことができないう仲間がいたときに(当時は医療保険などありませんでした)みんなでお金を出し合い助け合える仕組みを作りました。(集まったお金はパブのマスターが管理していました。今でいう共済制度や労働金庫みたいなものですね)そのうち、お互いの賃金や労働条件を話し合い「みんなでこれ以下の条件で働くはやめよう」(最低賃金協定)という取り決めをしたことがルーツとされています。